
アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

1999. 7. 31

No. 42

クマの霊送りの儀礼

人間世界からの数多の土産を携えて
クマ神は神々の世界に帰る。

写真：チセに招じ入れられたクマ神（上）
早朝のヌサ（下）



アイヌの霊送り

アイヌ民族博物館が平成11年に実施したクマの霊送り

1

アイヌの動物神の霊送りは、広く一般的にはイオマンテ、あるいはイヨマンテと呼ばれているが、送りの対象となる動物、送りの形態、地域等によって、オマンテ、カムイオマンテ、カムイホブニレ、ホブニレ、オブニレ、オブニカなどといった名称に分けられる。

送りの対象となる動物は、北海道に棲息する野生哺乳動物ほとんど全てが該当するが、地域、あるいは個人によって、対象外となるものもある。

そうしたなかであって、クマの霊送りは、全道的に実施されている。シマフクロウの霊送りとともに、最大かつ最重要な儀礼とされているが、先に記したように、種々の形態があり、それに伴って名称も異なっている。その形態を見ると、①生捕した仔グマを1~2年飼養して送る、②クマを獲ったその場で送る、③シラツチセ、クチャで送る、④獲ったクマをコタンに持ち帰って送る、といった4形があり、②、③においては、狩猟者だけで送る場合と、コタンの者呼び集め、小宴をなして送る場合とがある。このうち、①は最もよく知られている形で、旧記類にもよく記されている。イオマンテ、あるいはイヨマンテは、多くはこの形を指している。

2

さて、アイヌ民族博物館では、本年6月13日から同15日の3日間、クマの霊送りを実施した。8度目の実施である。本来、霊送りは11月頃から翌年3月頃までの冬期間に実施されるものであるが、本儀礼は、6月初旬、アイヌ民族博物館が飼養していたクマが老衰死したことによる実施であり、異例ともいえる時期の霊送りとなった。

上述したように、クマの霊送りにはいくつかの形態があるが、今回は、クマが死亡した時点で解体を終えていたので、頭骨に鎮座するクマ神をチセに招き入れたの儀礼 すなわち、山で

獲ったクマをコタンに持ち帰っての送りと同様の形態をもった。

以下、4日間に及ぶ送り儀礼を略述してみたい。

準備

儀礼の実施が決まった段階で、材の採取、及び用具づくりに着手し、供物類づくりと合わせて、儀礼の前日にはすべての準備が整った。因みに、今回の儀礼で製作・使用した用具類は、イナウがシンヌラッパ用も合わせて約100点（キケチノイエイナウ：16、キケバラセイナウ：3、チェホロカケイナウ：50、ストウイナウ：16、ハシナウ：10、他）、ヘベライが72点（チトクパアイ：60、チノイエアイ：6、イトクパアイ：6、土産用を含む）、キケウシパスイが16点、他に、カムイペパスイ、オクメウェニ、ユクサパオニ、ク、タクサ、ソラリフなどで、併せて製作した土産類は、サツチェフ、ニツオシトなどで、他のニンカリ、タマサイ、エムシといった土産は博物館資料を用いた。また、供物類は市販の材料を用いて、オハウ、ラタシケフなど、10種を製作した。

本祭

仔グマ飼養型の霊送りの場合、クマ神を眠らせる前日に前祭が行われ、アペフチカムイをはじめとして、多くの神々に霊送りの開始を告げ、期間中の守護をお願いするわけであるが、今回の霊送りは、すでにクマ神は霊となっているので、儀礼は前祭と本祭初日を併せた形で始められた。

儀礼の初日である6月13日午後、最初に酒漉しとともに、シラリエカムイノミが行われた。続いて、クマ神をロルンブヤラからチセ内に招き入れ、上座に西向きに安置させて、カムイノミを行った。なお、クマ神を招き入れた際、同神に対して、イヨマンテリムセを1回披露している。歓迎の意味である。

カムイノミ後、招き入れたクマ神にタマサイ、ニンカリ、シトを飾りつけ、さらに後頭部にキ

ケチノイエナウを2本置いた。

本夜は、仔グマ飼養型の霊送りの場合の本祭の初日の夜に当たり、クマ神を招き入れた後は饗宴が催されるのであるが、本儀礼においては、歌舞は割愛し、数名の職員がクマ神と時を共にしたに止めた。理由は、カムイノミが夜10時近くに及んだため、日常業務を持った女子職員を帰宅させたことによる。

2日目は、午後、カムイノミの後、職員山丸郁夫、野本正博の両名により、クマ神の頭骨の化粧 ウンメムケが行われた。並行して、他の職員は、サツェフ、ヘベレイ、ニツオシト、アマムタラ、カムタチタラなどといったクマ神に持たす土産の製作、イナウにケマをつけ、ヌサに立てる イナウロシキを行った。

ウンメムケ終了後、クマ神を上座に安置して、カムイノミを行った。その際、クマ神の前に、オハウ、ラタツケフ、シトなどの供物を供えた。カムイノミ終了後、クマ神をユクサバオニに安置し、ロルンブヤラの前に立てた。クマ神は、モウル、ルウンペを着て、タマサイをつけ、着飾っている。人間世界での最後の姿である。こうした盛装をもって、クマ神は神々の世界に帰っていくわけであるが、ここで、クマ神を前にしての最後のカムイノミが行われ、次に、最後の饗宴が催された。まず、参席者全員によりイヨマンテリムセが披露された。続いて、チャラバが行われた。周知のとおり、チャラバは、チセの屋根上から、シトやクルミ、菓子などを撒くことで、クマ神に、人間世界が如何に食べ物豊富などであるか、楽しい世界であるかを見せるためのものである。仔グマ飼養型の霊送りの場合、本祭の1日目、クマ神をスマウネ眠らせ、ヌサの前に安置させた後に行われる。

チャラバの後、ふたたび踊りが始まり、アイヌ民族博物館職員、木村イトフチ、上田トシフチ、新井田セイノフチと、ヤイサマが続き、場が盛り上がったところで、吉村冬子フチがカムイユカラを披露された。

饗宴の最後は全員でイヨマンテリムセを踊り、クマ神との別れを惜しんだ。続いて、全員の「ホクン カラ ホクン」の掛け声のなか、クマ神はロルンブヤラから外に出され、東に向けてヌサに置かれた。そうして、男子職員により東の空高くヘベレイが射られ、クマ神は

神々の国へと旅立った。

3日目は、早朝、クマ神の旅立ちを確認し、ユクサバオニを西向きにした。次に、アベフチカムイに、クマ神を無事に旅立たせることができたことの報告と、協力してくれた諸神への感謝のカムイノミを行った。このカムイノミをもって、霊送りの諸事は一応終了となり、引き続いて、シンヌラッパが行われた。シンヌラッパは、クマの霊送りなど、大きな儀礼に付随して行われるもので、かつて、墓参の習慣のなかった時代に、アイヌは、この儀礼の実施をもって、故人を偲び、供養したのである。

シンヌラッパの終了とともに、3日目の行程はすべて終了した。翌日、霊送りに関わるすべてが終了したことの報告と、アベフチカムイ他関係諸神への感謝のカムイノミを行い、霊送りを終えた。

3

アイヌ民族博物館では、これまで霊送りを7回実施しているが、いずれも仔グマ飼養型の送りであり、今回の送りは初めての経験である。儀礼の手順は仔グマ飼養型と大同小異であり、また、過去何度か経験した職員も数名いたこともあって、儀礼自体は比較的スムーズに進行することができた。

近年、アイヌ文化の伝承・保存活動が道内はもとより、広く日本各地で行われているが、有形・無形文化の基層にあるのが精神世界であり、霊送り儀礼の実施は、その世界を知ることである。そうした意味において、今回の儀礼の実施は、改めて得るものを多とした。

最後に、今回の儀礼の実施にあたって、多くの方々のご協力を賜った。なかでも、藤村久和氏（北海学園大学教授）には、終始一貫してご指導を賜った。また、上田トシフチ、木村イトフチ、新井田セイノフチ、吉村冬子フチには、ご高齢にも関わらず夜遅くまでご同席いただき、さらには、ヤイサマ、カムイユカラを披露していただいた。さらに、下記の方々には、ご多忙の折にも関わらず、ご参席いただいた。記して深甚なる謝意を表する次第である。

飯田 昭市（北海道ウタリ協会室蘭支部）

平 光雄（北海道ウタリ協会室蘭支部）

豊川 重雄（北海道ウタリ協会札幌支部）

山田 國雄（北海道ウタリ協会白老支部）

上野 正信（北海道ウタリ協会白老支部）
 野本 久栄（北海道ウタリ協会千歳支部）
 小石川和廣（北海道ウタリ協会苫小牧支部）
 大谷 洋一（北海道立アイヌ民族文化研究センター）
 笹村 直幸（アイヌ文化振興・研究推進機構）
 町田 宗鳳（シンガポール大学）
 北原次郎太（札幌学院大学聴講生）
 田村 将人（千葉大学学生）
 丹菊 逸治（千葉大学大学院生）
 楠本 勝子（北海学園大学学生）
 なお、今回の儀礼は、祭主を伝承課職員山丸
 郁夫が務め、館長山丸和幸が総括した。

（秋野茂樹）



写真4 クマ神への土産が飾られたヌサ



写真1 クマ神を迎えてイヨマンテリムセ



写真5 カムイノミ



写真2 ニンカリ、タマサイなどで飾りつけられたクマ神



写真3 化粧 ウンメムケを終えたクマ神



写真6 神々の国へ旅立つ姿のクマ神



写真7 チャラバ



写真8 上田トシフチと新井田セイノフチ



写真9 東方の空高くへベレアイを射る



写真10 クマ神が旅立った後のヌサ

平成11年度アイヌ文化教室の予定

- 第1回「アイヌ文化体験講座 / オオウバユリを掘ろう」
 日時：7月10日（終了）
 講師：村木美幸（アイヌ民族博物館学芸員）
- 第2回「アイヌ文化講座 / アイヌの女たち」
 日時：8月28日
 講師：萩中美枝（日本口承文芸学会会員）
- 第3回「アイヌ文芸講座 / 口承文芸の夕べ」
 日時：10月2日
 講師：本田優子（アイヌ民族博物館学芸員）
 伝承者：上田トシ・黒川セツ（平取町在住）

- 第4回「アイヌ文化講座 / アイヌ絵のなかの蝦夷錦」
 日時：10月22日
 講師：中村和之（釧路湖陵高等学校教諭）
- 第5回「アイヌ文化講座 / アイヌの衣服」
 日時：11月
 講師：児玉マリ（アイヌ民族博物館学芸員）
- 第6回「アイヌ語講座 / よくわかるアイヌ語」
 日時：日程未定 [2日連続]
 講師：中川 裕（千葉大学文学部助教授）

アメリカ合衆国における「アイヌ展」の展示製作

現在、スミソニアン国立自然史博物館において、特別展覧会「Ainu - Spirit of Northern People (アイヌ - 北方民族の魂)」が開かれている。

アメリカの博物館で、このような規模のアイヌ展が開催されるのは、初めてのことであり、企画した同博物館ウィリアム・フィッチャー博士にとっては念願の展覧会であった。

同展は、アイヌの過去と現在とを結び付けた、壮大なスケールで構成されている。

フィッチャー博士は、北太平洋の諸民族文化の交錯、その軌跡を視野にいれながら、アイヌの存在を、縄文時代からの歴史の拡がりのなかでとらえた。

現在、アメリカの博物館では、従来の研究者による一方的な民族文化の展示に対して、批判的である。そのため企画の段階から主役となる民族が参加し、自らの視点で、歴史や文化の再考、現代の状況をも展示に組み入れることが一般的になっている。つまり、展示される側と展示する側との共同作業により、博物館における研究の成果が、一般に公開されるのである。

また、主役となる民族にとっても、アイデンティティを確認できるような展示であることが求められている。ただし、これは最近の新たな傾向であり、これまでの常設展示には、展示される側の民族を偏った視点でとらえた内容のものが多く、検証が必要とされている。

今回のアイヌ展では、民族の協力者として、デュブレイ・千里氏が共同キュレーターに選ばれた。同氏は企画の段階から関わり、展示構成、展示資料の選定、日本での資料の借用交渉、カタログ制作などの一連の作業に携わった。

当館が協力を依頼された理由は、アイヌ文化の伝承活動を核とする、当館の活動、特に、チセ（家屋）の技術継承と、イヨマンテ（熊の霊送りの儀式）の継続的な実施という点が、評価されたためである。当館はこの依頼を受け、展示製作の技術面で協力することとなり、筆者が現地に派遣された。

現地での作業は主にスミソニアン協会の展示製作部門 - Office of Exhibits Central (以下 OEC) - で行われた。

以下に、チセとイヨマンテの一場面を再現したジオラマ展示、それにイタオマチブ（板綴舟）模型の製作過程を簡単に説明する。

製作に必要な材料は、基本的には現地調達とした。ただし、イヨマンテを再現したジオラマ展示では、主要なイナウ（木幣）などについては、日本から完成品を持ち込んだ。また、これらの展示に必要なとなる、無地あるいは文様入りの莫座等のガマ製品についても、同様に完成品を持参した。

筆者が、OECに出向いた時には、すでに最終的な展示プランが練り上げられ、展示製作にゴーサインが出ていた。筆者は展示の担当デザイナーから、各構成部における展示の狙いと、その中でジオラマ展示がどのような効果をもたらすかということについての説明を受けた。展示プランは展示企画者の意図に基づくものだが、チセとイタオマチブの展示デザインには、賛成できなかった。提示されたデザインは演出効果が優先され、本来の姿としては未完成のものであった。今回の展示が技術のみによる表現ではなく、アイヌの精神文化を尊重したものとされるならば、可能な限り完成した姿に形作ることが望ましく、このデザインは変更された。展示製作は、アメリカ人スタッフとの共同作業であり、彼らに完成品のイメージを持たせるために、まず、チセとイタオマチブの模型を製作し、これをもとに作業が進められた。

イタオマチブは当初、船首部分のみのデザインであったため、用意された材料では長さが足りず、実物の約3分の1に縮小した。

材料のイエローシーダー（米ヒバ）は、カナダ北西海岸の先住民ハイダから入手した。この木は耐朽性が大きく、特に水湿に強いという特徴を持っており、船材として適している。

樹齢300年以上、直径1メートル強の太木は各パーツに切り分けられ、余った部分も他の展

示品づくりに利用された。

イタオマチブの特徴である船底部をチョウナやモッタなどの道具を使って掘り出す。その上に船首材と船尾材を立て、船の側板を止めるシキを固定して、側板を湾曲させながら止めて行く。部材の接合には、マニラ麻でできた縄を使用した。この曲線が、船の美しさを左右するので、この部分に最も気を使った。帆は、文様入りの莫蔭（ガマ製）を横にして張る。この帆の揚げ方は、秦檜丸撰『蝦夷生計図説』を参考にしたものである。

チセの製作に際しては、博物館の展示規約に基づく説明があり、着火性の強い材料を避け、移動展という性質に配慮した構法で製作することを確認した。そのため、チセの屋根は、照明器具との十分な距離がとれず、小屋組の茅葺きはできなかった。チセの大きさは、昨年、当館で復元したポンチセ（小さな家）とほぼ同じ規模で、たたみ12畳ほどである。材料は、平原インディアンの住居であるティピの柱材で、俗に「ティピーボールパイン」と呼ばれるマツを使用した。この材料は、マツ特有のヤニの強い匂いと弾力性がある。

はじめに伝統的な小屋組を水平部材の上に組み立て、構造部材の強度の確認を行った。その結果、一部をボルトなどの金具で補強をしたが、ほとんどの部材の結束は、現地で調達した南米産の麻縄（2本縊）を使用した。壁や床などの面的な部分は、パネル化して、柱や梁などの主要な構造材に取り付けた。これは、移動展に配慮した結果である。また、室内に展示する民具類も合わせて製作した。

イオマンテのジオラマは、チセに付随して展示した。当館が伝承している祭壇を復元し、エカシ（古老）たちが熊神を囲み、カムイノミ（神への祈り）を行っている場面を再現した。

以上、筆者が製作にあたった、伝統的な生活を再現したジオラマ展示は、あくまでも展示テーマの内容を理解するための補足である。この展示をアイヌがどのように評価するか、また、日本での博物館の展示が、アイヌにとってアイデンティティを確認できる内容になっているのか、今後、アイヌ文化復興の動きのなかで、博物館の果たす役割は大きい。

（野本正博）



スミソニアン国立自然史博物館エントランス



イタオマチブの模型



OECスタッフとチセの完成を祝う



イオマンテのジオラマ展示

博物館短信

第1回アイヌ文化教室/アイヌ文化体験講座

テーマ：「オオウバユリを掘ろう」

日時：7月10日（土）午前10時～午後2時

講師：村木美幸（当館学芸員）

参加者：17名

- * 子供対象。当館裏の「コタンの森」においてアイヌの伝統的食材トゥレブ（オオウバユリ）を掘り、鱗茎から澱粉を採取。その後チセ（伝統家屋）内に移り、炉端でアイヌ伝統料理を試食した。

儀礼の実施

4月26日 チブサンケ（舟下ろしの儀礼）

5月1日 安全祈願祭

6月13～15日 熊の霊送りの儀礼

- * 当館が22年間飼育していたヒグマ（愛称トコタン）が老衰死したのに伴い、3日間にわたって送り儀礼を実施した（2～5頁）。

古式舞踊公演

第5回カムイノミ・イチャルパ（伊達市）

期日：6月27日

主催：ウタリ協会伊達支部

出演：白老民族芸能保存会会員10名

第14回石神火まつり（青森県森田村）

期日：7月24日

出演：アイヌ民族博物館職員18名

派遣協力

スミソニアン国立自然史博物館展示協力

期間：3月3日～5月1日まで

場所：ワシントンD.C スミソニアン研究所

派遣者：野本正博（伝承課）

- * 昨年5～10月に引き続いての派遣。前回製作した伝統家屋チセ、板綴り舟、熊送りの儀礼

ジオラマ等の民族資料35点を、特別展『アイヌ：北方民族の精神』開幕（4月30日）にあわせて展示した（6～7頁）。

平成11年度普及啓発講演会

期日：7月3日

主催：（財）アイヌ文化振興・研究推進機構

会場：とかちプラザ（帯広市）

テーマ：「十勝アイヌと絵師・平沢屏山」

パネラー：村木美幸（学芸係長）

宿泊研修の実施

期間：7月7～8日

研修：苫小牧市立開成中学校2年生57人

- * チセでの宿泊体験を中心に、ムックリ製作、アイヌ古式舞踊、伝統料理調理などに挑戦した。当館が宿泊研修を受け入れるのは初めて。

日胆地区スタンプラリー開始

期間：5月1日～翌年2月末

主催：日胆地区博物館等連絡協議会

白老民族芸能保存会平成11年度総会の開催

期日：7月16日

会場：当館1号チセ

- * 山丸和幸会長（当館専務理事）ほか現役員を再選。11年度は口承文芸鑑賞会、アイヌ語学習会、カムイノミ学習会、アイヌ文化祭への参加などの事業を提案、承認された。

「子ぐま三兄弟」の名前決定

- * 前号で紹介した「子ぐま三兄弟」の名前が、海（長男）、陸（次男）、萌（長女）に決まった。ゴールデンウィーク中、来館者から名前を募ったところ、400名から応募があり、名付け親となった4名には記念品を贈呈した。

博物館視察訪問

6月3日 タイ空軍司令官夫妻

6月14日 金泳三韓国前大統領夫妻

アイヌ民族博物館だより No.42

発行：財団法人アイヌ民族博物館

〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4

TEL：0144-82-3914

FAX：0144-82-3685

THE AINU MUSEUM 1999. 7. 31

印刷：株式会社北海道機関紙印刷所

〒006-0806 札幌市北区北6条西7丁目

TEL：011-716-6141

FAX：011-717-5431